

「夢追求型」
フリーター研究アプローチの再考

野村 駿

Reconsideration of Approach on
“Dream-pursuing types” of Freeter Studies

NOMURA Hayao

教育論叢 第59号抜刷
2016年3月

「夢追求型」フリーター研究アプローチの再考

野村 駿

1. 研究目的と構成

本稿の目的は、「夢追求型」フリーターを対象とした先行研究（以下、「夢追求型」フリーター研究）を、研究アプローチの観点から整理することを通して、既存の研究成果を明らかにするとともに今後の課題を提示し、その課題を乗り越える方途を探ることである。

1990年代以降、長期に及ぶ経済不況を背景として日本社会は不安定化しているといわれる。特に若年労働市場においては、求人数の減少による就職難や新規学卒労働市場の不安定化による若者の「スムーズな移行」（小杉 2005）の困難化といった現象は社会問題化され、数多くの研究が蓄積されてきた。その嚆矢ともなったフリーター¹研究では、フリーターの増加を、主に労働市場の変容や企業の雇用慣行の変化といった構造的側面と「やりたいこと」志向や現在志向といったフリーターに特徴的とされる意識的側面から説明してきた（小杉 2003, 小杉編 2002 など）。若者の意識的側面に着目した研究の成果は、その後の若者政策へと結実している（宮本 2015）。

しかし、これまでのフリーター研究では、主に定量的手法が採用され、定性的手法による研究は少ない。そのため、フリーターの労働・生活世界の詳細は、その多くがいまだ未解明のままとなっている。中でも、「夢追求型」²（日本労働研究機構 2000）に分類されるようなフリーターに関する研究は相対的に少なく、彼らの労働・生活世界のほとんどが明らかにされてこなかった³。

そこで本稿では、「夢追求型」フリーター研究を、研究アプローチに着目して整理し、これまでの研究成果を明らかにする。そして、新たな研究アプローチの検討を通して、今後の研究課題を提出する。そもそもフリーターという言葉が、自分の夢の実現のためにあえて正社員を選択しない若者を呼称するために作られたことから、現在において「夢追求型」フリーター研究を整理することは、1980年代後半に生み出された「フリーター」がその後いかに研究対象として位置づけられてきたのかを跡づける作業ともなる。

以下、本稿では、第2章で「夢追求型」フリーター研究を、研究アプローチに着目して整理し、既存のアプローチの特徴を明らかにするとともに、その限界を示す。そしてこの限界を乗り越えるための方途として、新たなアプローチを検討する。第3章では、フリーターを構造的側面から捉えた先行研究を、4つのレベルに分けて整理する。第4章では、新たなアプローチに基づく研究を今後の検討課題として、いくつかの論点を例示しながら検討する。最後に、本稿における知見をまとめるとともに、その知見が持つインプリケーションについて論じる。

2. 「夢追求型」フリーター研究の整理 —研究アプローチに着目して—

「夢追求型」フリーターとは、「仕事以外にしたいことがあるため、当面の生活の糧を得るため

にフリーターになったタイプ」の若者である（労働政策研究・研修機構 2012）。先行研究の整理に入る前に、この定義に従って、「夢追求型」に分類されるフリーターの量的な変遷について述べておきたい。現在、「夢追求型」フリーターはどれほどの規模で存在しているのだろうか。労働政策研究・研修機構は、2001年、2006年、2011年の3時点において、日本労働研究機構（2000）によるフリーター3類型、すなわち「モラトリアム型」「夢追求型」「やむを得ず型」に基づき、その量的把握を行っている。労働政策研究・研修機構（2012）によると、「夢追求型」フリーターは、14%（2001年調査）→25%（2006年調査）→23%（2011年調査）と推移している（「モラトリアム型」は47%→44%→37%、「やむを得ず型」は39%→31%→40%）⁴。この結果からは、「夢追求型」は3類型の中で最も少ないものの、無視できない規模で存在していることがわかる。

それでは、こうした「夢追求型」フリーターを対象とした先行研究はどのように行われてきたのであろうか。本稿では、研究アプローチに着目し、①フリーター間の差異から「夢追求型」フリーターの特徴を明らかにする研究と、②フリーターの意識の特徴である「やりたいこと」志向に着目した研究に分けて整理をする。それを通して、これまでの研究成果を明らかにするとともに、今後の課題を提示する。

（1）「夢追求型」フリーターの特徴—フリーター間の差異に着目した研究—

フリーター間の差異に着目して「夢追求型」の特徴を明らかにした研究として、小林（2006）と永吉（2006）がある。小林（2006）も永吉（2006）もフリーターを正社員との対比で捉えるだけでなく、上記のフリーター3類型を用いて、フリーターとして括られる若者内部での差異に着目した分析を行っており、その結果として「夢追求型」の特徴を明らかにしている。

小林（2006）はまず、収入と余暇活動におけるフリーター間の差異を分析し、「夢追求型」フリーターの収入が3類型の中で最も低い水準にあること、それにもかかわらず、彼らの余暇活動が他の類型のフリーターのみならず正社員と比べても、特に具体的な目標への投資という点で充実していることを明らかにしている。そして、充実した余暇活動を可能にする要因として、家族資源に着目し、家族との関係についてフリーター間での比較を行っている。その結果として、「夢追求型」の出身階層が比較的豊かであり、「親との金銭的やり取り」が最も多いことを明らかにし、「『夢追求型』フリーターが自分の夢を追求することが可能なのは、比較的裕福な出身家庭からの援助によるところが大きいのである」と結論付けている（同上, pp.106-109）。

一方、永吉（2006）はフリーター間の自尊感情の差異を分析し、「夢追求型」の自尊感情が正社員と同程度に高いこと、それとは対照的に、「モラトリアム型」「やむを得ず型」では自尊感情が低いことを明らかにしている。そしてこの類型ごとの自尊感情の高低を説明するために、フリーター自身のフリーター観および職業観の差異に着目して分析を続けている。それによると、フリーターという地位に対しては、「夢追求型」「やむを得ず型」で否定的であるのに対し、「モラトリアム型」では肯定的であること、「職業を転々とする」として「夢追求型」で否定的であること、「将来に対する見通し」として、「夢追求型」でフリーター継続希望が極めて少なく（「モラトリアム型」

7.7%、「夢追求型」2.6%）、正社員希望も最も少なく（「やむを得ず型」60.7%、「モラトリアム型」42.3%「夢追求型」は39.5%）、夢の実現を希望する者が最も多いこと（「モラトリアム型」12.8%、「夢追求型」47.4%）、「彼らがフリーター期間を、自分の夢を職業とするためのステップとして捉えていること」などが明らかにされている（同上、pp.133-136）。

以上の先行研究では、フリーター間の差異に着目して、「夢追求型」フリーターの特徴が明らかにされていた。これらの研究で採用されているアプローチを、ここでは「フリーター間比較」アプローチと呼ぶ。「フリーター間比較」アプローチによって、フリーターとして括られる若者には、その出身階層や価値観という点で多様な若者が包含されており、その中でも「夢追求型」フリーターは、相対的に出身階層が高く、フリーターという地位に対する認識や職業観という点で他の類型のフリーターとは異なる傾向を持つことが明らかにされた。

(2) 「やりたいこと」志向という若者の意識に着目した研究

「夢追求型」フリーターの意識の特徴として、「やりたいこと」への強いこだわりが指摘できる。なぜなら、彼らは自身の夢、すなわち「やりたいこと」をし続けるために、または実現するために、フリーターを選択し、フリーターを継続している若者だからである。そこで本節では、フリーターの「やりたいこと」志向を扱った研究を、「夢追求型」フリーター研究の1つとして位置づけ、それらの研究の中でも、嚆矢的研究である下村（2002）と現在における「やりたいこと」志向の実際まで論じた久木元（2003, 2010）を取り上げ、その研究成果を整理する。

下村（2002）は、フリーターの職業意識の分析を通して、フリーターの職業意識の特徴として「やりたいこと」志向があること、フリーターが「やりたいこと」の有無を基準として自分たちを「良いフリーター」と「悪いフリーター」に分けて捉えていること、「やりたいこと」志向が非フリーターにも共有されていることを明らかにしている。そして、高校生において「やりたいこと」が職業選択の基準となっていることを指摘し、その背景を、雇用環境の悪化によって「良い」進路が減少し、学業成績など従来型の客観的な指標では進路が選択できなくなった生徒が、「やりたいことかどうか」という主観的な選択基準をその代替基準として用いて、進路を選択するようになった結果生じた現象だとしている（同上、pp.81-97）。

また、久木元（2003）は、フリーターが語る「やりたいこと」という意識に、より焦点化した議論を行っている。すなわち、日本労働研究機構（2000）のヒアリングデータの再分析を通して、フリーターが語る「やりたいこと」という言葉に想定されている前提を明らかにするとともに、「やりたいこと」を語ることによる意図せざる帰結として、(a)「やりたいこと」に対する要求水準が上昇することによって、逆に「やりたいこと」が見つけにくくなる、(b)「やりたいこと」を続けることが困難になった場合に、「やりたいこと」を諦めることが困難になる、(c)「やりたいこと」は本人の内部にのみ存在するものとみなされているために、他者の介入が抑制され、誰にも止められなくなる、の3つを挙げている（同上、pp.75-83）。こうした「やりたいこと」の論理について、その後久木元（2010）は、将来が不安で明るい展望が抱きにくい現在において、「やりたいこと」

が、2000年前後におけるそれとは異なる意味合いを持つものへと変化している可能性を指摘している。すなわち、2000年前後における「やりたいこと」が、正社員という働き方を選ばない積極的な理由として語られ、自分自身の選択に何らかの方向性を与えてくれるものとして想定されていたが、社会のさらなる変化を受け、「やりたいこと」に対する強いこだわりは仕事の選択基準として明確に表明されなくなり、現状と照らし合わせながら、現状の維持・打開という文脈で語られる、より現実的なものへと変化したと論じている（同上、pp.134-139）。

このように、フリーターの意識に着目した研究では、その特徴として、「やりたいこと」志向が注目され、そうした意識が生まれる背景にまで踏み込んだ分析がなされている。これらの研究で採用されているアプローチは、「夢追求型」フリーターの「やりたいこと」にこだわる意識に着目している点から、本稿では、「フリーター意識着目型」アプローチと呼ぶこととする。

(3) 「夢追求型」フリーター研究の既存アプローチと課題

以上、「夢追求型」フリーターを対象とした先行研究の整理を通して、既存の研究アプローチとして、「フリーター間比較」アプローチと「フリーター意識着目型」アプローチの2つを指摘した。しかしその一方で、「夢追求型」フリーター研究の課題として、以下の2点が指摘できる。

第1に、夢を追うという行為そのものへの視点の欠如である。すなわち「夢追求型」フリーターは、仕事以外の「やりたいこと＝夢」を追求・実現するといった理由からフリーターを選択する存在として捉えられてきたにもかかわらず、実際に彼らがどのようにして夢を追っているのか、その内実は明らかにされてこなかった。それは、フリーターの意識が注目される一方で、その意識の表出としての行為が看過されてきた結果であると考えられる。そのため、彼らが夢を追う過程で創出する多様な戦略や、様々な行為に対して行う意味づけなども併せて未解明のままとなっている。

第2に、「夢追求型」フリーターのその後への視点の欠如である。つまり、「夢追求型」フリーターが夢を諦めた後に「モラトリアム型」になる、といった彼らの職業への移行の結末とそれ以後の具体的な生活世界が看過されてきた。先行研究において、夢を追う全ての若者が自身の夢を実現することはできないと述べられている一方で（小林 2006, 荒川 2009）、実際に夢を追求する若者が、夢を諦めた後にどのような状態に至るのかについては明らかにされていない。近年フリーターからの離脱が困難になっているという指摘（労働政策研究・研修機構 2012）を考慮すると、夢を諦めた「夢追求型」フリーターの多くは、そのままフリーターを続けている可能性が高い。また「やりたいこと」志向がフリーターの実存の肯定のために重要な意味をもつという新谷（2006）の指摘を踏まえるならば、「やりたいこと＝夢」を断念することは、彼らの実存を否定しかねない。そのため、彼らのその後の生活を大きく左右する契機となりうる。これまでの先行研究は、以上のような「夢追求型」フリーターのその後の現状を見過ぎてきたのである。

これらの課題は、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界へのまなざしの欠如というより大きな課題に包括できる。夢を追うという行為や「夢追求型」フリーターのその後が明らかにされてこなかったのも、彼らの労働・生活世界が明らかにされてこなかったことと密接に関連している。言

い換えれば、フリーターとして働きながら夢を追うという彼らのマイクロな現実世界の様相が描き出されなかったために、その過程での様々な行為や彼らのその後が等閑視されてきたのである。

こうした課題の背景として、これまでの先行研究が主に定量的手法を用いており、定性的手法による研究が相対的に少ないことが指摘できる。「フリーター間比較」アプローチにおいても「フリーター意識着目型」アプローチにおいても、量的データもしくは質的データを量的に分析することによって知見を得ていた。そのため、フィールドワークなどの定性的手法を用いて、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界に迫るような研究は、総じて行われてこなかったと考えられる⁵。フリーター研究全体を見ると、フィールドワークなどの定性的手法による研究は一定数蓄積されているものの（新谷 2002, 居郷 2004, 山根 2005 など）、その数は相対的に少なく、フリーター世界全体が描き切れているとは言い難い。

それでは、こうした課題に対してどのようなアプローチが有効なのだろうか。本稿では、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界の解明を志向するにあたり、彼らを圍繞する社会構造に着目するアプローチを提示したい。高山（2009）が指摘するように、若者の諸実践や諸行為は、様々なレベルの構造に規定される中で生起しており、構造を通して「夢追求型」フリーターの行為や労働・生活世界を見ることで、彼らの実践を社会的行為として位置づけることが可能となる。さらに中西（2009）が指摘するように、構造に規定される中で発現する主体性に着目することで、夢を追うプロセスにおける様々な戦術や意味づけなどを明らかにすることができる。

しかし、フリーター研究において、社会構造から捉える視点が完全に欠如していたわけではない。むしろ、フリーターを複数の社会構造から捉えることによって、個人の問題としてのフリーター像を脱構築し、社会問題として再構築してきた側面が大きい⁶。そこで次章では、フリーターを社会構造から捉える先行研究を整理し、「夢追求型」フリーター研究への示唆を試みる。

3. 社会構造に着目したフリーター研究の整理 —4つの構造レベル—

1990年代以降の経済不況を背景に増加したフリーターを社会問題化したフリーター研究にとって、社会構造への着目は大きな意味を持つ。すなわち、それは、個人の問題を社会問題として再定位する機能を果たした。先行研究においてフリーターは、様々なレベルの社会構造との関連で捉えられるとともに、特に個人のフリーター選択やその集積としてのフリーター増加の要因として社会構造は取り上げられている。これらの先行研究で着目された社会構造には、①労働市場、②学校、③家族、④仲間集団があり、これら4つの社会構造は、相互に関連しながらフリーターを規定している。本章ではこの点に注意しながら先行研究の整理をする。

まず、よりマクロな社会構造として注目されたのは若年労働市場であった。若年労働市場に着目した研究では、経済不況を背景としたその変容がフリーター増加の要因として指摘されている（小杉・堀 2002, 小杉 2003）。小杉・堀（2002）は若年労働市場の変化として、新規高卒労働市場では求人数の減少と、高学歴者への雇用代替・非正社員への移行という雇用管理の変化を挙げ、こうした労働需要側の変化によって学卒未就職者が増加したとする。また高等教育卒業者の労働市場で

は、大学卒業者の増大による供給過剰が未就職者増大の背景であると論じている。こうした労働市場の変容は、学校から職業への移行の形を変容させた。特に求人数の減少に伴って、高卒就職における学校と企業の「実績関係」に基づいた「学校経由の就職」が1990年代において衰退し、学校から職業への移行が不安定化した結果として、近年におけるフリーターの増加が指摘されている(本田 2005)。また、小杉(2005)は、「スムーズな移行」を阻む契機を、主に学校段階における「つまずき」として整理し、学校を中退した者、進路を途中で変更した者、欠席日数が多かったり、成績が悪かったりしたために学校推薦を受けられなかった者、就職活動をしなかった者などでフリーターになる者が多いことを指摘している。このように学校という社会構造に規定される形で生徒はフリーターを選択し、フリーターになっていくとされる。

そして、こうした労働市場の変容と学校の就職斡旋機能の衰退は、学校の「道具性(=生活手段の獲得)」と「表出性(=情緒安定)」の喪失につながり、生徒の学校へのコミットメントの弱化へと帰着する。その結果として、学校外の人間関係に「道具性」と「表出性」を満たす場を求めた生徒たちは、進学・就職という学校へのコミットメントを前提とする進路から離脱していき、フリーターになっていく(新谷 2004)。この他にも新谷(2002)は、仲間集団の下位文化として、場所・時間・金銭の共有を特徴とした「地元つながり文化」の存在を指摘し、こうした下位文化の共有によって、若者がフリーターを選択していくプロセスが明らかにされた。すなわち、若者は「フリーターであることによって場所や時間の共有が可能となり、場所や金銭を共有することでフリーターでの生活が可能になるのである」(同上, p.164)。ここに、仲間集団というミクロな社会構造に規定されるフリーターの姿を読み取ることができる。

一方、労働市場の変容は、若年層全体に様に影響するのではなく、一部の若者に偏った形で影響していることが明らかにされている。その中で「生家の豊かさ」、すなわち出身階層がフリーター経験に影響を及ぼすことが明らかにされている(上西 2002, 太郎丸 2006)。太郎丸(2006)は、社会移動論の観点から分析を行い、「出身階層が低いほうが、フリーターになりやすく、いったんフリーターになった人は、フリーターのままである(つまり低い階層にとどまる)傾向がある」(同上, p.47)ということを示している。これらの知見からは、出身階層、すなわち家族が社会構造としてフリーターを規定していることを示している。

以上、労働市場、学校、家族、仲間集団という複数の社会構造が、相互連関しながらフリーターを規定していることを先行研究の整理を通して描き出した。こうした様々な社会構造に規定される形で、若者はフリーターを選択し、さらにはフリーターを継続するのである。

4. 新たな研究課題の検討 — 「夢追求型」フリーターと構造 —

2章では、「夢追求型」フリーター研究の整理を通して、「夢を追求という行為そのものへの視点の欠如」「『夢追求型』フリーターのその後への視点の欠如」という2つ課題を提示し、これらの課題を包括するより大きな課題として、「『夢追求型』フリーターの労働・生活世界の未解明」を挙げた。3章では彼らの労働・生活世界を社会構造から捉えるべく、社会構造に着目した先行研究を整

理した。これらを受け、本章では「夢追求型」フリーターの労働・生活世界の解明に向けて、彼らの諸行為やその後を社会構造から捉える論点を提示する。それを通して、社会構造から「夢追求型」フリーターの労働・生活世界を捉えるアプローチの重要性について論じたい。具体的には、「夢追求型」フリーターを上述した4つの社会構造から捉えることで、3章で提示した2つの課題を具体的な論点として提示し、彼らの労働・生活世界解明に向けての糸口を検討する。

まず、「夢追求型」フリーターの行為に関しては、4つのレベルの社会構造それぞれから論じることが可能である。ここでは紙幅の限界から、学校と仲間集団という2つのレベルの社会構造から論じる。学校を社会構造と設定した場合については、喜始（2015）の作家志望の美大生を対象とした研究が参考になる。喜始（2015）は、美大の実技重視のカリキュラムや「就職」に対する独特の意味付与に着目し、それらが学生の進路を就職以外の方向に水路づけていることを明らかにしている。学校という社会構造が、学生の夢を追うという行為に与える影響について、今後は専門教育を行っている専門学校や専門職大学など様々な教育機関に焦点を当てて分析していくことが求められる。また、学校に代表されるような、若者の夢を追うという行為を支える空間において、同じ夢を持つ者同士の相互作用過程から夢を追う行為に対するミクロな影響関係を見ることもできる。同じ夢を持つ仲間の存在や、そうした仲間との相互作用が彼らの行為にどのような影響を及ぼすのかが重要な論点となる。こうした相互作用は、教育機関に限らず、学校外でも行われるものであるため、「夢追求型」フリーターと他者との相互作用が、彼らにどのような影響を与えているのかについても検討の余地はあるだろう。

次に、家族と仲間集団という2つの社会構造から「夢追求型」フリーターのその後を照射する方途を探る。家族も仲間集団も若者が夢を追う際に重要な役割を果たす存在である。それは小林（2006）が明らかにしたような、家族からの援助という形をとる場合や、新谷（2002）が明らかにしたような、場所・時間・金銭の共有を伴う「地元つながり文化」を通じた一種の支え合いの形をとる場合もある。そうした役割を果たす家族や仲間集団という社会構造は、「夢追求型」フリーターが夢を諦める際に、一種のセーフティーネットとしての機能を果たすと考えられる。それはすなわち、夢を諦めることによる心理的負担の軽減や他の職業への斡旋などによって、彼らが次のステージへとスムーズに移行することを支える機能である。そうした他者からの援助を含む様々な相互作用を通して「夢追求型」フリーターはその次の段階へと移行していくと考えられるのである。

このように、「夢追求型」フリーターを社会構造から捉えるアプローチは、彼らの夢を追うという行為の実際を明らかにするとともに、彼らの移行プロセス全体を照射する可能性を持つ。そして、これらひとつひとつの現実を明らかにすることによって、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界の現実を描き出すことが可能となる。

5. 結語

本稿では、「夢追求型」フリーター研究を研究アプローチに着目して整理し、「フリーター間比較」アプローチと「フリーター意識着目型」アプローチの存在を指摘した。これらが先行研究の成果と

して位置づけられる。その一方で、先行研究の課題として、「夢追求型」フリーターの行為とその後、より広く言えば、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界の実際が看過されてきたことを指摘した。そして、これらの課題を乗り越える方途として、社会構造から捉えるアプローチを提示し、複数の論点をあげて検討した。最後に、本稿のインプリケーションについて述べておきたい。

本稿で取り上げた、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界の解明という研究課題は以下の 2 点で意義を持つ。第 1 に既存のフリーター研究に対する意義である。本稿では「夢追求型」フリーター研究の整理を通して、既存の研究アプローチの偏りを指摘し、社会構造からみる労働・生活世界の解明という新たな論点を検討した。これらの論点からは、「夢追求型」フリーター研究が採用してきた既存のアプローチでは捉えきれない彼らの新たな現実を明らかにすることができる。フリーターの現実世界全体を明らかにするという課題にとって、本稿の提示したアプローチは有益な知見をもたらすものとなる。そして「夢追求型」フリーターの労働・生活世界を明らかにすることによって、フリーター内部の多様な現実に関する本格的な議論を開始することが可能となる。

第 2 に、これから夢を追おうとする次世代の若者に対する意義である。これまで夢を追う若者を対象とした研究は、様々な領域でいくつかの職業に限定する形で行われてきたものの、ひとつに体系立てて論じられることはなかった。そのため、そこから得られる情報は限定的なものにならざるを得なかった。本稿で提示したアプローチは、夢を追う若者の一形態としての「夢追求型」フリーターが生きる現実世界を、体系的に論じることを可能にする。こうした現実は、これから夢を追おうとする次世代の若者に対して重要な情報を提供するものとなるだろう。

本稿では、先行研究の整理を通して、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界を詳解するための新たなアプローチを検討したが、今後はこのアプローチに基づいた調査によってひとつひとつ事例を積み重ねていく必要がある。そうした経験的研究と論点の提示・仮説の生成を繰り返しながら、「夢追求型」フリーターの労働・生活世界を少しずつ明らかにしていくことが今後の課題である。

[注]

- ¹ 本稿では、フリーターを「15～34 歳の男性又は未婚の女性（学生を除く）で、パート・アルバイトして働く者又はこれを希望する者」という厚生労働省の定義で用いる。なお、現在においてもフリーターは一定の規模で存在し続けており、社会的に不利な立場に置かれ続けている。例えば、内閣府（2015）「平成 27 年版子ども・若者白書」によると、2002 年以降のフリーター数は 2003 年の 217 万人をピークにその後減少し、現在まで約 180 万人前後で推移している（2014 年現在 179 万人）。一方、15～34 歳の年齢人口に占めるフリーター率は、2002 年には 6.1% だったが、2014 年には 6.8% まで増加している。また、年収は正社員だけでなく派遣社員や嘱託職員と比較しても少なくなっている（総務省統計局「平成 26 年 労働力調査年報」）。
- ² 日本労働研究機構（2000）では、「フリーターになった契機」と「フリーターになった当初の意識」から、フリーターを「モラトリアム型」、「夢追求型」、「やむを得ず型」の 3 つに類型化

している。その中で、「夢追求型」について、「生活手段として目指す職業とは全く関係のないアルバイトに従事している者と、アルバイトやフリーランスの立場で目指す職業における収入をある程度得ている者の双方が含まれている」とし、「芸能関係にしても職人・フリーランス型の職業にしても、それらの労働市場は未経験者を新規学卒一括採用のような形態で正社員に採用する市場ではなく、安定した地位と収入を得るまでには長い試行錯誤の期間を必要とする市場である」としている（同上, pp.22-23）。

- 3 子ども・若者の「夢」や「夢追い」を扱った研究としては、片瀬（2005）と荒川（2009）がある。これらの先行研究では、高校の個性化・多様化政策を背景に、高校生の志向性や進路意識が「夢追い」へと傾斜する方向に変化していることを明らかにしている。しかし、いずれの研究も学校段階における高校生の意識に焦点があり、離学後に実際に夢を追う若者の実践や行為に着目する視角を持ち合わせていない。この点からも、実際に夢を追っている若者の労働・生活世界は、いまだ未解明のままとなっているといえる。
- 4 労働政策研究・研修機構（2012）では「モラトリアム型」に対して、「やりたいことを探したい、正社員になりたくないなどの理由からフリーターになったタイプ」、「やむを得ず型」に対して、「正社員になれない、または家庭の事情などで、やむなくフリーターになったタイプ」という定義をあてている。
- 5 「夢追求型」フリーターの生活世界の一端を明らかにした数少ない研究として生井（2013）がある。生井（2013）は、「夢を追っている」と表象される「夢追求型」フリーターの中に、必ずしも「成功してその活動で生計を立てる」ことや「その活動を職業にする」ことを夢として掲げずに、クリエイティブな活動に励む若者がいることを指摘している。
- 6 例えば、仁井田（2008）は、1988年から2004年までのフリーターに関する新聞記事を分析し、フリーターが個人の問題として語られていたことを明らかにしている。

〔文献〕

- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪—高校改革の社会学』東信堂。
- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ—進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: pp.151-170.
- , 2004, 「フリーター選択プロセスにおける道具的機能と表出的機能—現在志向・『やりたいこと』志向の再解釈」『社会科学研究』55(2): pp.51-78.
- , 2006, 「フリーター・ニートと教育の課題—差異化と抵抗の観点から」『教育学研究』73(4): pp.148-159.
- 生井達也, 2013, 『「現実」を生きる『夢追い』フリーター』『常民文化』36: pp.25-56.
- 居郷至伸, 2004, 「キャリア形成なき能力育成のメカニズム—コンビニエンス・ストアにおける非正規従業員を事例として」『教育社会学研究』74: pp.289-307.
- 上西充子, 2002, 「フリーターという働き方」小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構, pp.55-74.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会。
- 喜始照宣, 2015, 「美術系大学からの卒業後進路選択—作家志望に着目して」『高等教育研究』18: pp.191-211.

- 久木元真吾, 2003, 『『やりたいこと』という論理—フリーターの語りとその意図せざる帰結—』『ソシオロジ』 48(2): pp. 73-89.
- , 2010, 『『やりたいこと』の現在』小谷敏・土井隆義・芳賀学・浅野智彦編『若者の現在 労働』日本図書センター, pp.117-148.
- 小杉礼子, 2003, 『フリーターという生き方』勁草書房。
- , 2005, 『『スムーズな移行』の失敗』小杉礼子編『フリーターとニート』勁草書房, pp.21-93.
- ・堀有喜衣, 2002, 『若者の労働市場の変化とフリーター』小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構, pp.15-35.
- 編, 2002, 『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構。
- 小林大祐, 2006, 『フリーターの労働条件と生活—フリーターは生活に不満を感じているのか』太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, pp.97-120.
- 下村英雄, 2002, 『フリーターの職業意識とその形成過程—『やりたいこと』志向の虚実』小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動』労働政策研究・研修機構, pp.75-99.
- 高山智樹, 2009, 『『ノンエリート青年』という視点とその射程』中西新太郎・高山智樹編, 『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, pp.345-401.
- 太郎丸博, 2006, 『社会移動とフリーター—誰がフリーターになりやすいのか』太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, pp.30-48.
- 中西新太郎, 2009, 『漂流者から航海者へ—ノンエリート青年の〈労働・生活〉経験を読み直す』中西新太郎・高山智樹編『ノンエリート青年の社会空間—働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, pp.1-45.
- 永吉希久子, 2006, 『フリーターの自己評価—フリーターは幸せか』太郎丸博編『フリーターとニートの社会学』世界思想社, pp.121-142.
- 内閣府, 2015, 『平成 27 年版子ども・若者白書』。
- 仁井田典子, 2008, 『マス・メディアにおける『フリーター』像の変遷過程—朝日新聞(1988-2004)報道記事を事例として』『社会学論考』 29: pp.107-146.
- 日本労働研究機構, 2000, 『調査研究報告書 No.136 フリーターの意識と実態—97 人のヒアリング結果より』日本労働研究機構。
- 本田由紀, 2005, 『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。
- 宮本みち子, 2015, 『若者の移行期政策と社会学の可能性—『フリーター』『ニート』から『社会的排除』へ』『社会学評論』 66(2): pp.204-223.
- 山根清宏, 2005, 『『引越屋』の労働世界—非正規雇用で働く若者の自己規定』『日本労働社会学会年報』 15: pp.59-81.
- 労働政策研究・研修機構, 2012, 『労働政策研究報告書 No.148 大都市の若者の就業行動と意識の展開—「第 3 回若者のワークスタイル調査」から』労働政策研究・研修機構。